

会員数(56-11現在)

逗子地区	153名
葉山地区	260名
大船地区	57名
合計	470名

吟道月報

監人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

56-11月
第112号
発行

根岸 岳 萃
綿村 集
中杉 山 愛雪 岳風

吟ありてこそ

堀内支部C組

白

井

麗

風

四十年も昔に存ります。旅順市内に住んでおりました頃の事です。春ともなれば吉野桜がらんまんとき咲き乱れ、秋には蒨丈ほどに伸びたコスモスが華やかな色に競ひました。そして大陸特有の大きな月が皎々と輝く頃ともなると、きまぐれ陸軍病院の裏庭あたりから、すばらしい吟声が流れてきたもので、今にして思えば、金州城や九月十三夜であつたろうと思われ、すが、当時のあの兵隊さん達は、今どうしておられるやら、誘はさうけて詩舞をはじめ、伺もなす主人に言われて詩吟をはじめました。思えばほとんどの皆勤の

状態で今日まで続けて参りました。もちろん敵場が近へとハラうことが大なる理由の一つではあつたでしょうが、それよりも、下手ながらも漢詩を力ハッばハ吟ずるとハラうことに何とも云えなハ魅力があつたように思えます。

早ハもので一人息子を交通事故で亡くしてもう四年に存ります。詩吟詩舞を通じて多くのお仲間が、大きな心の支えに存りました。皆様の温かい励ましやお心遣ハがあつたればこそ悲しみさのり越えて来られたものと感謝しております。末熟者です。が精進を念じておりますので今後共はろしく御指導を賜りますようお願い申上げます。

葉山町文化祭

詩吟、詩舞の会をかえりみて

菊薫る十一月三日、恒例の葉山町文化祭行事の一環として才15回詩吟詩舞の会が行われ、ました。今年は殊のほか盛会で新しい顔、懐しの顔ぶれにもお目にかかれて満員盛況の賑わいでした。

かえりみますと、この文化祭の一回目は昭和42年でその時は箏曲、日本舞踊等々おりまじりで行われ、その時の番数は15、ついで才二回目からは詩吟詩舞のみとなり、番数が55、その後年々盛会となり、今年の場合をみると番数142、参加者200名となり、当日の欠席者はわずか四、五名という数字です。すっかり軌道にのっておりますが、これも参加者全員が一致協力の姿勢でのごまるところにあると思えます。今後の課題としては、あくまでもマンネリ化をぬよう努力し、益々盛会ならん事を期待しております。

(愛岳)

逗子市文化祭

逗子A支部

詩吟、詩舞発表会

村田瀨風

晴天に恵まれた十一月八日、才31回逗子市文化祭「かながわふるさとまつり参加」詩吟詩舞発表大会が行われ、逗子在住の各流派の方達が図書館ホールに会して、日頃の練習の成果を発表しお互いに楽しい交流が行われ、頑心会からも逗子地区の方達が参加して協力しております。流派によって吟法は少し異なっておりますが、同じ吟道を志す者「一吟天地の心」として同じ町に住む者同志が力を合せて盛り上げ、年毎に盛大に行われております。頑心会は会員数も多く、それだけに皆さんが熱の入った吟詩舞を演じていただき、大会の役員も会の運営がスムーズに進行する様にと色々気を配って御来場のお客様も最後まで吟に詩舞に感動を、会場をあとにされまじ。私達も来年の二十周年にむかえ、ますますがんばりたいと思えます。

詩吟にピアノはよく似合う……(2)

平山忠純

(音楽家・日本歌曲吟詠会会長)

詩吟が盛んになったのは江戸時代で、幕末は志士の間で爆発的ブームとなった。詩吟のもつ悲愴的な調子が好まれたからだろう。そして本来、声楽であるべき詩吟がその性格を失ったままで、今日まで継承されて来たといっている。↓大正時代には大きく分けて二派があったものが↓
↑分派が分派を生み、現在では数え切れないほどの流派がある。

流派によっていろいろに吟じられていて、同じ詩でも定まった吟じ方がない。だが音階は五音しかないのので、別の詩でも似たり奇つたりに聞える。そういふ矛盾がある。だから、よほど詩吟好きの人でも、詩吟の会で全部を聞き通すことは普通である。現実には途中で席を立ってしまふ人が多いようだ。

しかし、もちろん詩吟そのものには大変な魅力がある。詩もすばらしいし、魂を揺さぶるいい節調を持っているのだ。本当にいい吟

誦に出会うと、だれれも涙を流さんばかりに感動する。涙を流すほどの感動を与えらるゝのは、他の歌曲では考えられないことだ。詩吟は日本が誇るべき歌曲であると思う。

だが発表が悪く、音程が不正確で、表現力が伴っていないのでは興ざめである。詩吟の指導のほとんどは口授法である。つまり指導者が吟ずるのを聞いて、それをそのまま口真似するのだ。運悪く音感の悪い指導者についた弟子は迷惑の上な。でもその伴奏なしで音程を正しくするのは至難の業なのだ。だからピアノで伴奏することは、音楽家である私にとってごく自然な流れとして考えつゝのことだった。(此号又の号で)

(日経新聞より転載)

◎ 碩心会・大船地区吟道温習会

とき。十一月二十九日(日)九時四十分～三時三十分
ところ。鎌倉市勤労福祉会館

(巻の声) 聞えてくるままに……

- ◇ 趣味なのに指導法が固すぎる。型にはめすぎ
- ◇ 新人が入るとそちらへ重点がかかり、古ハ者はおきざりの感がする(ふがみかな?)
- ◇ 新体詩、長詩等はむずかしいし、あまりやる気がない。発表する機会もなへし……
- ◇ 指導者は自分自身納得がはってからの指導してほしい。俄か仕立だと今日の吟法と明日の吟法が違ひ迷ってしまふ。
- ◇ 指導の立場になつてはじめて指導者の苦勞がよくわかつた。
- 十人十色の性格の人々をまとめてゆくという事はとても難しい。忍耐と努力が必要。
- ◇ 全体的にみて古い教室ほど出席率が悪いので苦勞する。マンネリ化、種がつきた、あきた、むずかしくなった等々……
- ◇ 同じ教室内で伝役位がまちまちの場合の指導法に苦慮する。

秋三題

海女の苗飛沫もすでに秋の潮
 秋曉の笈を染めて志摩の海
 秋草の籬にくつろぐ日和かな

(昌山)

(追記)

秋月号入会の家久利子に中伝(高山)を追記
 東京より転入

(入)

(堀内支部) 坂越正山(西) 兼山町堀内 九七五

〇 四六八―七五―八一三ニ

〇 四六八―七五―八三ニ

〇 四六八―七五―九一六

〇 四六八―七五―四六九四

(退)

158 伊藤湧風(中) 大貫貞山(夕) 230 菊地瑞山

252 加賀山翠泉 (二色) 高橋和子

